

九尾のきつね

むかし、ひとりの旅人が、道ばたで小便しょうべんをしながらふと下を見ると、白い骨ほねが落ちていました。小便が、骨にかかっていた。旅人は、ふざけて、

「つめたいか」とききました。すると、骨が、

「つめたい」と答えました。

「温かいか」ときくと、

「温かい」と答えます。旅人は気味が悪くなって、急いでそこをたち去りました。すると、骨があとからついてきます。旅人はおそろしくなって、村の酒屋まで来ると骨にいました。

「ちよつとここで待っていてくれ。酒を買ってきて飲ませてやるから」

旅人は、骨をそこに待たせておいて酒屋に入り、裏口うらぐちからにげてしまいました。

何年かたったある日のこと、旅人は、またあの酒屋の前を通りかかりました。すると、酒屋のむかいに新しい酒屋ができていて、美しい女が酒を売っていました。旅人は、そこへ入っていつて酒を飲みながら、

「何年前、この店の立っているちよつとこの場所で、みような骨をだましてにげたことがあるんだ」と話しました。

女は、

「ああ、おまえだったのか。その骨はわたしだよ。今までおまえを待っていたんだ」というと、たちまち九尾のきつねになり、旅人とびかかって食ってしまいました。

骨に小便などひっかけるものではないというおはなし。

* 九尾のきつね しつぽが九本あるきつね。妖怪

出典『語りの森昔話集1おんちよろちよろ』村上郁再話

原話『朝鮮民譚集』孫晋泰／郷土研究社